

教会教育委員会関東地区研修会
2024.2.12

コロナ禍後の教会 教会とは何かを改めて考える

石田 学

日本キリスト教協議会教育部理事長

1

はじめに

お招きに感謝します。与えられた主題に即して、まず教会の歴史を概観したうえで、現代の教会が直面している現実と、これからの教会がどのような在り方を目指すべきかをいっしょに考え、話し合う機会になればと思っています。ポスト・コロナと言われている今、ただコロナ禍前に戻るだけでは教訓とはなりません。次の二点を考えてみましょう。

- 1) 疫病に対して教会が歴史的におこなってきた活動は、現代に通用するわけではない。
- 2) 今回のコロナ禍を、教会とは何かを改めて考える機会としなければならない。

2

1. 教会と疫病

1) 教会は歴史的にどう対応してきたか

i) 主イエスの宣教

この主題を考えるにあたり、まず原点であるイエスに焦点を当ててみたい。イエスが宣教の働きを始める中で、治癒行為が大きな比重を占めていたことは福音書から明らかである。今回は四福音書をすべて検証することはできないので、マルコ福音書にしぼって考えてみる。

- ・イエスの言葉による教えと治癒・悪霊追放は結びついている
権威ある新しい教え 「権威ある新しい教え」
憐れみに動機付けられたイエスの宣教 「深く憐れんで」

3

ii) 古代教会の宣教

神の御子の憐れみ深さに基づく教えは、憐れみゆえの癒し・悪霊追放と切り離されてはいない。初代教会もまた、このイエスの教えの伝統を受け継ぎ、憐れみの働きをおこなってきた。

ローマのクレメンスがコリント教会に宛てた手紙 (1クレメンス38)

「それゆえに、私たちの体全体が、イエス・キリストの中で維持されるようにしよう。そして各々は、各自に任ぜられた恵みの地位通りに、その隣人に従うことにしよう。強者は弱者を配慮し、弱者は強者を敬うように。富者は貧者を援助し、貧者は神に対し、彼の貧しさを満たしてくれる物をお与えくださったことに感謝を捧げるように」

4

ユスティノス『第一弁明』 67-8

二世紀中頃のローマ教会の様子がわかる貴重な証言

「次に、生活にゆとりあがってしかも志ある者は、それぞれが善しとする基準に従って定めたものを施します。こうして集まった金品は指導者のもとに補完され、指導者は自分で誇示ややもめ、病気その他の理由で困っている人々、獄中につながれている人々、異郷の生活にある外国人のために扶助します。要するに彼はすべて窮乏している者の世話をするのです」。

5

(背教者) ユリアヌス (帝) の書簡

「あのガリラヤ人らは彼らの中の貧しい者だけでなく、我々の (貧しい者) をも助けている」 (Ep.84)

ロドニー・スタークの著書から

ロドニー・スタークは『キリスト教とローマ帝国』(新教、2014年)で、二世紀と三世紀にローマ世界を襲った二つの疫病のさなかに、キリスト教徒が「社会的にも靈的にも対応する能力を発揮し、裕福な異教徒や異教の神官らが感染地域から逃げ出し、病人を見捨てたのに対し、キリスト教徒はそこにとどまり、異教徒の看護をおこなった」ことが、結果としてキリスト教徒の増加をもたらしたと結論付けている。

(pp.95-124)。

6

iii) その後のキリスト教の歴史と教会の働き

中世の教会の墮落とペスト

ヨーロッパ中世史を専門とする神崎忠昭は中世西ヨーロッパで流行したペストについて、次のように述べている。1347年10月中央アジアからシチリアのメッシーナに上陸したペストは、「瞬く間にアルプス以北のヨーロッパに伝わり、当時のヨーロッパ人口の3分の1から3分の2、約2000万から3000万人が死亡したと推定されている。その後も疫病は数年に一回の割合で繰り返され、17世紀までに100回以上の大流行が生じ、多くの死者を出した」。

(『ヨーロッパの中世』慶應義塾大学出版会、2015年、p.362)

7

しかし、教会の現実はどうであったか・・・

「カトリックの偉大な歴史家ルドヴィヒ・フォン・パストール（一八五四―一九二八年）は、公会議主義*を断罪して教皇マルティヌス五世から十八世紀末のピウス六世までの教皇庁の事跡を、二二巻の大著において詳述したが、この敬虔な碩学によるならば『このような危機に際して、このように品性の劣った人物たちが、聖ペトロの後継者の座にあったことは、教会にとって最大の不幸であった』」。

(出村彰『中世キリスト教の歴史』教団出版局、2005年、p.370)

*公会議主義とは、教皇庁の分裂を収束させるために出された主張で、（ローマ）教会の最高権威は（教皇ではなく）公会議にあるとする立場。

8

こうした悲惨な現実の中で、キリスト教は疫病（ペスト）や他の病、貧者の救済などにどう対応したのであろうか。多くの高位聖職者らが贅沢と保身、快楽と政治的画策に専念していた中でも、下級司祭や修道者たちが古代から教会が受け継いできた伝統を実践していた。パリ在住の文化史家である竹下節子はその事実をこのように述べる。「病や死そのものを『穢れ』とは見なさず、病む人、苦しむ人、障害のある人の尊厳と切り離して考えることは、キリスト教のアイデンティティの根幹に生き残った。それは疫病という危機的状況において最も表面化した」。

（『疫病の精神史—ユダヤ・キリスト教の穢れと救い』ちくま新書、2021年、p23f）

9

竹下によると、中世のベネディクト修道会は修道院にホスピスを併設し、貧しい人々、病人、死に瀕した人々に居場所と食事を提供し、医療を施した。また司教館にもホスピスが併設され、十一世紀には聖アントニウス会、テンプル騎士団、聖ヨハネ・ホスピタル騎士団などが同様の活動をおこない、十四、十五世紀のペスト流行時には、貴族たちの「善行」としての寄付を資金源にして、各地の町々に修道会によるホスピスが誕生した。また病者に触れることは聖性の表れとみなされた（同、p.65-69）。

十六世紀の対抗宗教改革の時代には、ペストの流行によりミラノの貴族たちが率先して脱出したのに対し、大司教カルロ・ポメロ枢機卿はミラノに留まり、一日に六万人に食べ物を配り、ペスト患者の体を自ら洗ったという（同、p.110）。世界宣教の拡大に伴い、宣教師たちはハンセン病の介護施設を作り、現地の人々のためのインフラ整備や教育の推進に力を注いだ。

（同、p.113）

10

2) 近代以降の変化

近代科学（医学、病理学）の発展は、病、疫病に対する人々の意識を劇的に変えた。疫病は神の罰ではなく病原菌によるものであるとの知識が常識になっていった。したがって、病や疫病からの救いも、魂の救いから身体的な治癒へと比重が変化していった。祈りが失われたわけではない。だが、祈りや敬虔なおこない、苦行ではなく、回復のための治療を求める時代が到来したのである。そこにはもはや、教会の関与する領域はあまり残されていない。病の癒しを担うのは聖職者ではなく科学者・医療従事者だからである。→それ以前とは反対の傾向に

11

現代のわたしたちが直視せざるをえない現実：

教会の働きにおいて近代初期までとそれ以後で大きく変わったことは、教会が直接人々の看護に関わることが無くなったことであろう。西欧の古代末期から中世にかけて、修道院は地域医療を担っていた。しかし近代以降の医学および医療の発展に伴い、診療と看護が専門職となり、現代では医療従事者ではない一般のキリスト者が関わる余地は、一部のボランティア活動を除いて、ほぼなくなった。教会が永らく果たしてきた歴史的な役割とは対照的に、現代においておそらく教会は、コロナウィルス禍により、歴史上初めての事態を世界規模で体験させられている。教会が感染者を支援するよりも、教会が感染源となる現実直面させられたことである。

12

3) 新型コロナウイルス禍が現代の教会に与えた衝撃

今日、教会は多くの現代人にとって関心外になったが、コロナ禍は教会を人々の関心の対象とした。ただし否定的な意味合いにおいて。

それは教会が感染源となるという事例が報道されたからである。そのため多くの教会がこの問題への対応を迫られることとなった。

日本でコロナ禍のはじめから「三密」を避けることが強調されてきたことは、教会を当事者の立場へと追い込んだ。教会で礼拝その他の集会を続けることへの危惧、不安が、教会の内部に拡がったからである。教会での集会は直接名指しされることは日本では少なかったものの、必然的に集団での集会行為、つまり三密の典型として警戒された。

13

2. コロナ禍により日本の教会が直面させられた課題

1) 日本の宗教性における穢れと恐れ

日本の宗教性は、古代から現代に至るまで、穢れへの恐れに支配されてきた。穢れは多くの災いの源となる。なによりも共同体にとって和と秩序を乱し破壊的な影響を及ぼす。そこで、いかに穢れを避けるか、いかに穢れから清められるかが、日本における宗教行為のおもな在り方であった。なかでも見えないもの、それが怨霊であれ呪いであれ疫病であれ、それらへの恐れが日本の精神風土には深く根を下ろしているのであり、古代から穢れ、祟りへの恐れとして人々の間に存在してきた。

「見えないものへの恐れ」は、現代日本でどう具現化したか

- ・福島原発からの放射能 → 穢れとの関連で理解された
- ・コロナウィルス → 穢れとの関連も恐れの原因であった

14

2) 日本の教会はどうしたか：教会の対応は適切だったか

教会がこれまでに起こってきた、おもな二つの対応に絞って考えて見たい。礼拝の自粛・中止・もしくは賛美歌を歌わないなどの

i) 礼拝の簡略化、そして ii) 礼拝のオンライン化である。

礼拝についての教会の対応

i) 礼拝の簡略化

そこに存在するかもしれない新型コロナウイルスへの恐れは、ひとつには自分たちにも感染リスクがあることであり、もうひとつは社会的迷惑の原因となることであろう。

礼拝の自粛・中止ではない仕方で、多くの教会のとった対策は、礼拝の短縮と様式の変更であった。礼拝において、皆で賛美や唱和をすることが、飛沫対策で問題とされた。必然的に、礼拝がいっそう説教中心になる傾向に拍車がかかることとなった。

15

ii) 礼拝のオンライン化

「オンライン化」と表題に記したが、その中の多くの教会は実際には「礼拝説教のオンライン化」を意味している場合も多い。

オンライン礼拝として礼拝全体を配信しているとしても、ライブ配信に参加している視聴者は別として、より多くの録画で視聴する人々の場合、礼拝の説教だけを目当てに早送りして、礼拝の他の部分は無視されることが多いように思われる。そうだとすれば、礼拝とは何か、オンライン礼拝とは何かが問われねばならない。

16

iii) 本当は、礼拝とは何かが問われているはずであったのに・・・

礼拝とはなにか、礼拝説教とはなにか。この根源的な問いを熟考することなく、その余裕もないまま、今回の新型コロナウイルス禍は、多くの教会をオンライン化へと走らせた。

オンライン礼拝配信の場合、画面に映るのは司式者と聖職者だけということが大半である。その礼拝に、はたして教会の本質である共同体性は成り立つのであろうか。

礼拝が「神とわたし」、あるいは聖職者である教師とわたし、という一対一の対応の集合体であると考えれば、聖職者だけが映し出される配信を礼拝とみなすこともあり得る。

17

こうした礼拝理解の場合、共に賛美し共に詩編を唱和することは、礼拝にとって付属的あるいは二義的なものと見なされる。礼拝の中心は説教を聴くことだと考えるなら、オンラインによる聖職者と視聴者の一対一で礼拝が成立することになる。

事実、オンラインによる礼拝配信は、「説教が礼拝」だという印象を一段と進めることになった。

18

iv) オンライン化の可能性と課題

オンラインによる礼拝配信が、礼拝形式の変化というだけにとどまらないのは、神へのアプローチが変化するからである。

かつては：教会に集い、そのことで共に神に近づいた

今の傾向：パソコンやスマートフォンで個人が神に近づく

いわば、見切り発車のような仕方で拙速に始められたオンライン礼拝は、もうすでに休止あるいは中止することができない段階に至っている。

その現実を踏まえて、改めて現在進行形のオンライン礼拝の意味と可能性を考えることが求められている。

19

v) 牧会上の課題

コロナ禍が教会に与えたもう一つの、そしていっそう重大な衝撃は、牧会上必要な人たちと対面で接することができなくなったことである。ほとんどの病院、福祉施設などが入院・入所者との面会を中止した。そのために、教会の重要な使命の一つである、生命の危機、精神の危機、霊的な危機に直面している人たちに牧会的な対応をすることができなくなった。さらに、教会での信仰者同士の交わり（相互牧会）がソーシャル・ディスタンスとして希薄化した。

私見によれば、これが最大の課題ではないか

20

牧会的な対応をもっとも必要とするその場に家族も聖職者も立ち入ることができないという現実を、ほとんどの牧師、教会関係者は、深く嘆きつつ、しかしそのまま受け入れてしまった。対面しない・できないということの問題を、はたして教会は乗り越えようと努力したのであろうか。既成事実としてあきらめ、受け入れたことは、医療よりも霊的な配慮を下位に位置づけることを教会自らが容認してしまったことになるのではないか。

1918年に流行したスペイン風邪の時、当時のフランスで「カトリックメディアは、『霊的救済が衛生対策よりも軽んじられ遺憾だ』と表明し、複数の大司教が信徒たちに対し、公式の祈りを捧げる為に集まるように呼び掛けた」という（竹下、P.202）。

21

死に行く人を慰め、安らぎを与える牧会の働きが、感染の可能性に警戒することに劣ることなのか。医療従事者は面会するが聖職者は面会できないことが問題ではないのか。医療関係者と同等の感染予防をとったうえで、必要とする人に面会し、牧会上の対応をすることは、身体的・精神的・霊的な危機に直面している人に絶対的に必要なことではないのか。

そのことに対して、多くの教会・聖職者はそれを聖なる行為ではなく、社会常識の範疇で考えたことが、わたしには最大の問題であるように思われる。

あまりに霊的なことから、ターミナル・ケアについて、教会も聖職者も後ろ向きでありすぎた。この点についてはわたし自身の反省材料でもある。いまからでも教団教派（協力も）で議論し、コロナ禍における対応を反省し改善する時が来ていると考える。

22

3. ポスト・コロナの教会を考える

- ・ コロナ禍は結局、教会にどのような影響を与えたか。
 - 教会の交わりの疎遠化、あるいは必要性の希薄化
 - 教会とは何かという従来の理解（集まる前提）の流動化
- ・ 教会は目先の対応に追われ、根本的な問題には対応していない。
- ・ しかし、ポスト・コロナと思われている今は、再考の機会。
- ・ パンデミックはこれからも起こり得る。
- ・ その時にまた同じ事態を繰り返さないため、教会の在り方を考える。
- ・ 教会の共同体性、信仰共同体であることが、教会の本質に関わることを、教会として考え直し、学び、共通理解とすることに力を注ぐべきではないか。

23

信仰が本質として持つ共同体性

- ・ 日本の、特にプロテスタント教会は、信仰を「わたしと神」の関係で捉え、教会は説教を聴き、信仰について学ぶ所と考えてきた。教会の共同体性は、あまり意識されてこなかった。
- ・ だが、聖書は教会が共同体であること、しかもキリストとのきずなによって存在している神の民の共同体として描いている。
 - 神の民、神の（羊の）群れ、神の家族、
 - キリストの体（としての一体性）

聖書に満ちているこれらの表現は、教会が本質において神に属する、キリストを頭として聖霊により結ばれている共同体であることを明らかにしている。

24

神が三位一体の神であることが、教会の共同体性の根拠

- コロナ禍を体験した教会は、三一論を固有性と独自性を持つ三つの位格の共同体性という視点から考察するべきであろう。
 - 教会が膨大な努力と時間を用いて三一論を展開したのは、神の内にある固有性の対等かつ互恵的な共同体性を確信したからである。
 - この共同体性は、ポスト・コロナの時代に特別な意味を持ちうる。
 - 教会は、三一の神の共同体性を地上で表し、生きる神の民だから。
- ① 父と子と聖霊の人格的固有性・独自性。
 - ② 三者の共同体性。
 - ③ 人間社会のモデルとしての教会共同体。

25

- **神はご自身が共同体性を持つ。**ゆえに教会は、共同体としての教会の在り方を、三一の神の共同体性に基づいて築き、深める。
- 1) 教会は常に・繰り返し、自分たちの在り方が三一の神の現実を反映しているかどうかを吟味し、改善してゆく努力をする。
 - 2) 教会は神の現実を規範とすべきであり、世の社会的現実を規範とするべきではない。（世の常識を教会に持ち込む問題）
- **神の三位一体は、教会が喜ばしい・人格的な対等性が保証された、賛美に満ちた互恵的共同体であるための根拠であり規範である。**
- 1) 教会はこの世に倣って家父長的、強者が支配し小さい者を苦しめる共同体ではなく、その対極でなければならない。
 - 2) そうであってこそ、非人間的で不公正な社会の現実に苦しむ人々にとって、教会は対抗（代替）共同体となる。

26

教会のこれからの在り方 （「百万人の福音」の記事から

わたしは礼拝を「信仰共同体としての教会が目に見える時」と定義しています。キリスト者はこの世界で、平日はそれぞれの生活の場に散らされ、ディアスポラ（離散の民）として生きています。日曜毎に神の民は見えるかたちで現れ、共に祈り、共に賛美し、感謝を献げ、み言葉を聴き、なによりも互いの存在を喜び合います。教会はオンライン化というルビコン川を渡りました。後に戻ることはありません。それでも、オンライン礼拝をはじめ、インターネットを介した集まりはあくまで補完的であり代替であることを自覚することが必要です。

27

主イエスは「すべての民を弟子にきなさい」（マタイ二八・一九）と言われた。主イエスの弟子となるということは、主イエスに倣う者となることである。それは**共同体の中で体験的に学び、実践することによってできること。さらに主イエスは愛と憐れみを教えた。どちらも共同体で体験することなしにはあり得ない。**わたしのライフ・パートナーは進行性の病を負っている。毎週礼拝の時、誰かが寄り添い、礼拝後は幾人もの人たちが取り囲んで語りかけ、慈しみを分かち合ってくれる。これまで病や痛みを負う人たちに対して、いつもそのようであった。教会とはこうした共同体なのだとなれば、共に集まることこそが教会を教会として成り立たせるのだと信じる。

28

- ・教会は神の三一性をこの世において具現化する共同体。
- ・教会は神の民の群れとして共に世を旅する者の群れ。
- ・教会は共に賛美し、共に祝い、共に祈り、共に旅する共同体。
- ・教会は神の愛と憐れみ、正義と公平を自分たちが生き、世に表す神の民。

これが、脱宗教社会の時代に、教会が神の恵みと救いを世に表し続ける使命を担う、「祝福された少数者 the blessed minority」の共同体として存在し続けるために自覚すべき在り方だと信じる。

この理解が教会全体に浸透しているなら、たとえ将来、再びパンデミックが起き、集会の休止や交わりの回避のような事態が起きるとしても、パンデミック後に教会が神の民の共同体としての本質をすみやかに回復することを可能にすると信じる。